



淡水魚ハヤによって耳介を蚕蝕された一検死例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 修, 服部, 秀樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/1769

174

淡水魚ハヤによって耳介を蚕蝕された一検死例

鈴木 修・服部 秀樹(浜松医大)

海中の死体の耳介や鼻が魚類によって浸蝕されることは、よく見られることであるが、われわれは最近、溪流中に発見された死体の、左右耳介が半分以上も淡水魚によって蚕蝕された一検死例を経験したので報告する。

昭和55年7月/3日、浜松市都田町の都田川上流の水深約60cmの川底に、海水パンツ一枚で首に水中メガネをかけた男性死体が発見された。その後の調べで、死者は30才の会社員であることがわかった。

本死体を検案するにあたり、第一に注目された点は、左右両耳介が半分以上も欠損し、その部分から血液が流れ出ていたことである。一見すると、刃物等で耳をそがれたような恰好であった。

全身には腐敗性変色はなく、顔面はうっ血しており、角膜の混濁は中等度で、眼結膜にうっ血強く、死斑は顔面、胸部、腹部、大腿前面に中等度に存し、指圧でわずかに消退する。死体硬直は全身の関節にかなり強くみられ、手掌、足底は漂母皮化していた。直腸温は水温と同じで21°Cであった。以上の死体所見から勘案して、死後約24時間程度経過しているものと推定された。その他外表には、死後に生じたと思われるわずかの擦過創と表皮剥脱以外は特に損傷等の異常は認められなかった。

胸腔を穿刺したところ、多量の溺水を認め、プランクトン検査は陽性であった。心臓血を採取し、アルコール検査を行なったところ、2.3%であった。おそらくこの男性は、酒に酔って、水中の魚を見ようと川に入ったところ、深みにはまって溺死したものと考えられた。

都田川上流にはアユの他に、多数のハヤが棲息しており、最初死体を引き上げた目撃者によると、水中でハヤが耳のまわりに大群をつくり、遠くから見ると、あたかも長い黒髪のように見えたという。確かに耳介をよく観察すると、欠損部辺縁には小魚の蚕蝕のあとがうかがえる。おそらく、水に流された際生じた耳介の傷口にハヤが群がり、耳介の軟部組織と軟骨を半分以上も蚕蝕したものと考えられた。

淡水魚によって死体が浸蝕された例はめずらしく、参考までに報告した次第である。